

平成 28・29 年度生物調査結果（概要）

1. 調査概要

（1）調査対象及び調査日

対象	調査日
鳥類	平成 28 年 10 月 26 日（秋期調査）、平成 29 年 1 月 23 日（冬期調査） 平成 29 年 5 月 26 日（春期調査）、平成 29 年 6 月 16 日（夏期調査）
昆虫類	平成 28 年 10 月 26 日（秋期調査）、平成 29 年 5 月 29 日（春期調査） 平成 29 年 7 月 6 日（夏期調査）、平成 29 年 9 月 15 日（秋期調査）
希少植物	平成 29 年 5 月 26 日

（2）調査方法

●鳥類調査

基地跡地内を徒歩で移動しながら目視で確認または鳴き声が確認された種を記録しました。

●昆虫調査

平成 22 年度調査で貴重な種が確認された場所において目視、捕虫網で採取された種を記録しました。なお、移動中に確認された種も記録しています。

●希少植物（サイハイラン、マツバラシ）

平成 22 年度調査において生育が確認された地点において、個体数を確認しました。



主な調査地点（昆虫類）

2. 調査結果

(1) 鳥類

①確認種

・4目16科27種が確認されました。

②渡り区分

記録状況から、各確認種の渡り区分を以下のように設定しました。

・留鳥

キジバト、オオタカ、ノスリ、コゲラ、オナガ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、ムクドリ、トラツグミ、スズメ、カワラヒワ、ウソ、ホオジロ、カワラバト(ドバト)の20種が該当すると考えられます。

・夏鳥

ツバメが該当すると考えられます。

・冬鳥

シロハラ、ツグミ、ルリビタキ、ジョウビタキ、アトリ、シメの6種が該当すると考えられます。

③希少種

環境省レッドリストおよび埼玉県レッドデータブックに記載されている種は、以下の4種でした。なお、埼玉県RDBの地帯区分では、本調査地は「低地帯 荒川以西」となります。

オオタカ (タカ目タカ科)	秋期調査中(平成28年10月26日)に、環境省RLで準絶滅危惧(NT)・埼玉県RDBで準絶滅危惧(NT2)にあたるオオタカが確認された。調査期間がオオタカの分散期(非繁殖期)にあたることから、偶発的な飛来の可能性が高い。
ノスリ (タカ目タカ科)	冬期調査中(平成29年1月23日)に、埼玉県RDBで絶滅危惧Ⅱ類(VU)にあたるノスリが確認された。調査期間はノスリの越冬期にあたり、埼玉県RDBには、「近年、見沼田圃では調節池造成地に越冬個体が見られている。この他、利根川や江戸川・荒川の河川敷の数ヶ所、北本自然観察公園等では、現在も越冬している。」との記述があり、本調査地内には猛禽類のものと考えられる古巣は確認されていないことから、荒川の河川敷付近で生息する個体が飛来した可能性が高いと考えられる。
ルリビタキ (スズメ目ヒタキ科)	冬期調査中(平成29年1月23日)に、埼玉県RDBで準絶滅危惧(NT2)にあたるルリビタキが確認された。冬鳥であり、過年度にも冬期に本種が確認されているため、本調査地で越冬している可能性が高いと推察される。
ホオジロ (スズメ目ホオジロ科)	春期調査中(平成29年5月26日)に、埼玉県RDBで準絶滅危惧(NT2)にあたるホオジロが確認された。平成23年の調査でも春期に本種が確認されており、林縁の藪地や植木畑周辺等に営巣することが知られている。本調査地は林縁に藪地が存在していることから、繁殖の可能性があると考えられる。

④外来種

外来種の選定にあたっては外来種の選定にあたっては「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成16年6月2日法律第78号）、「我が国の生態系に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」（平成27年 環境省）、「外来種ハンドブック」（平成14年 日本生態学会）を用いました。

確認種のうち、外来種はカワラバト（ドバト）1種でした。

特定外来種、生態系被害防止外来種には該当していません。

⑤確認種の選好環境および重要なエリア

・秋期調査より

いわゆる「都市鳥」と呼ばれる種のほかに、樹林性のオオタカ、エナガ、草地のような開けた空間と樹林の組合せを好むモズやジョウビタキ、カワラヒワ、藪を好むウグイスが確認された。

・冬期調査より

秋期調査で確認された種のほかに、樹林性のノスリ、ウソ、シメ、草地のような開けた空間と樹林の組合せを好むアトリ、樹林の林床を好むトラツグミ、シロハラ、ツグミ、ルリビタキが確認された。

・重要なエリア

本調査地では、樹林地が重要なエリアといえると考えられる。秋期調査では、重要種として樹林性のオオタカ、冬季調査ではノスリ、樹林の林床を好むルリビタキが確認されており、重要種ではない種でも樹林性、樹林に関連した環境（樹林の林床等）を好む種が比較的多く確認されているためである。

(2) 昆虫類 (主に大型種)

① 確認種

- ・平成28年10月26日の秋期調査で、11目68科136種が確認されました。
- ・平成29年5月29日の春期調査、7月6日の夏期調査、9月15日の秋期調査で、13目92科243種が確認されました。

② 希少種

環境省レッドリストに記載されている種は以下の2種でした。

なお、埼玉県RDBの地帯区分では、本調査地は「低地帯 荒川以西」となります

<p>エノキカイガラキジ ラミ(キジラミ科)</p>	<p>秋季調査中に(平成28年10月26日)及び夏期調査中(平成29年7月6日)に、環境省RLで準絶滅危惧(N1)にあたるエノキカイガラキジラミが北側の林縁のエノキにおいて1個体確認された。</p> <p>本種は本州と九州の丘陵地から低山地に分布する。幼虫は寄主植物であるエノキの葉にツノ状の虫えい(ゴール)を形成し、その開口部を貝殻状の白色分泌物で覆う特性がある。寄主植物は全国に普通であるが、本種の産地は局限されるうえに近年は減少が著しく、多くの既知産地で生息を再確認できない。激減した原因はわかっていないが、市街地に近い丘陵地では土地造成の影響を受けた産地も多いと思われる。また、河川敷の生息地では河川開発による環境変化も考えられる。埼玉県昆虫誌I(埼玉昆虫談話会1998)によれば、「埼玉県では未だ確認されていない」とされている。</p>
<p>アリヅカウカ (アリヅカウカ科)</p>	<p>秋期調査中(平成29年9月15日)に、埼玉県RDBで準絶滅危惧(N1)にあたるアリヅカウカが調査地内の草地や樹林等6ヶ所において6個体確認された。</p> <p>本種は北海道、本州、九州の平地から山地に分布する。詳しい生態は不明だが、国外では近縁の種がアリと共生することが知られており、本種も同様の生活史を送ると推測される。</p> <p>埼玉県昆虫誌(埼玉昆虫談話会1998)によれば、朝霞市からの記録はない。</p>

③ 注目すべき種 (下線は平成22年度調査報告書に挙げられた注目すべき種)

・バッタ類

確認された種には、希少種は含まれず、ほとんどがいわゆる一般種でした。そのうち注目される種としては、ホシササキリ、キアシヒバリモドキ、トノサマバッタ、ヤブキリ、キアシヒバリモドキ、ショウリョウバッタモドキが挙げられます。

・チョウ類

確認された種には希少種は含まれず、ほとんどがいわゆる一般種であった。そのうち注目される種としては、イチモンジチョウが挙げられます。

平成22年度調査で確認されたトラフジミは、今回確認されませんでした。

・コウチュウ類

確認された種には希少種は含まれず、ほとんどがいわゆる一般種であった。そのうち注目される種としては、ヤマトタマムシが挙げられます。

④外来種

外来種の選定にあたっては「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」(平成16年6月2日法律第78号)、「我が国の生態系に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」(平成27年 環境省)、「外来種ハンドブック」(平成14年 日本生態学会)を用いました。

平成28年秋期調査	アオマツムシ、プラタナスグンバイ、ヨコヅナサシガメ、コルリアトキリゴミムシ、ヤサイゾウムシ、セイヨウミツバチ、モンシロチョウの7種が確認された。いずれの種も関東周辺では広く定着しており、現在のところ生態系への深刻な被害の報告はなく、特定外来生物、生態系被害防止外来種には該当していない。
平成29年春期調査及び秋期調査	春期調査では、アオマツムシ、アワダチソウグンバイ、シロテンハナムグリ、ヒメカツオブシムシ、アルファルファタコゾウムシ、アカボシゴマダラの6種、夏期調査ではアオマツムシ、プラタナスグンバイ、アワダチソウグンバイ、シロテンハナムグリ、ヤサイゾウムシの5種、秋期調査ではアオマツムシ、カンタン、 <i>Dentatissus damnosus</i> 、アワダチソウグンバイ、アカボシゴマダラの5種、合計で10種が確認された。このうちアカボシゴマダラは生態系被害防止外来種の重点対策外来種に該当する。いずれの種も関東周辺では広く定着しているが、現在のところ生態系への深刻な被害の報告はない。

⑤重要なエリア

・草地②

基地跡地暫定利用広場「朝霞の森」として利用されているエリアの一部には草刈りが実施されていない場所が残されており、他のエリアと比べて、非常に多くの昆虫類が確認されており、現状が維持されれば、さらに多くの昆虫類が確認されると推測されます。

⑥定期的な管理が必要なエリア

・草地①

草地として調査を実施しましたが、大半がクズに覆われ、ススキなどのイネ科植物、ヨモギなどのキク科植物といった昆虫が多く見られる植物はエリアの端にわずかにみられる程度であったため、定期的な刈り取りなどによるクズの除去が望ましい。

確認された昆虫類も非常に単調で、種数が少ない状況です。刈り取りなどにより、状況

が改善されれば、草地②と同様な種が生息可能になると推測されます。

・樹林①、樹林②

両地点ともに木本の成長が進み、林床に光が届きにくい場所が多いことから、林床の植生が貧弱になり、あまり多くの昆虫類は確認されませんでした。間伐や、枝切りを実施し、光環境を改善することによって、より多くの昆虫類が生息可能になると考えられます。

なお、間伐や枝切りによって伐採した枝などは、一か所にためておくことにより、伐採木などに集まる昆虫類の発生が期待できます。

(3) 希少植物

①サイハイラン【埼玉県 RDB 準絶滅危惧 (NT)】

- ・12 地点で 149 株が確認されました。
- ・調査地内では、多数の株がまとまって生育し、前回調査で確認されなかった地点からも出現していました。人の手がほぼ入らず、サイハイランの生育に適した環境が維持されていたため、株数が増加したと考えられます。



サイハイラン

②マツバラン【環境省 RL 準絶滅危惧 (NT)、埼玉県 RDB 絶滅危惧 I A 類 (CR)】

- ・3 地点で 13 株が確認されました。
- ・斜上した樹幹や、木の根元に生育していました。
- ・埼玉県レッドデータブックでは、本調査地がある荒川西台地にマツバランが分布しているとされているが、自然分布ではない逸出由来の可能性があると記載されており、本調査地内の確認株も逸出由来の可能性が考えられます。



マツバラン